

実践 伊佐市立南永小学校

1 はじめに

本校は、伊佐市の南西に位置する米どころの集落に位置する極小規模校である。児童数13人で、うち8人は市内から特認生（伊佐市小規模校入学特別認可制度による児童）として通っている。「地域が育む学校」として、地域の人的支援や自然環境に恵まれ、小規模校の特性を生かした独自の教育活動を多く行っている。学校自慢として、活発な読書活動、全児童の一輪車乗車やハンドベル演奏を永年積極的に行っている。

2 教育課程に位置付ける読書活動

(1) 読書タイム

校時表に毎朝10分間の活動を位置付け、児童が主体的に本に手を伸ばし、本に親しむ態度の育成や落ち着いた学校生活をスタートさせる契機としている。活動は児童会が中心になって呼びかけ、終始児童が主体で行うことができる。

(2) 朗読朝会

毎週木曜日の始業20分間、朗読朝会を行っている。日常の音読活動を、全ての学びの場で読解力や表現力の向上に生かそうとするものである。全児童の前で、詩や短編作品、教科書の内容を暗唱して発表する。少人数学級での活動で不足しがちである多数の前での表現機会を確保することもねらいとし、児童はよりよい発表のための独自の読解や発表練習を行い、望ましい表現の技能を向上させている。



朗読朝会《低学年児童の発表》

(3) 読み聞かせ集会



職員によるエプロンシアター

児童一人一人が自身の好きな本についてのブックトークやアニメーションをしたり、児童相互・職員が読み聞かせを行ったりする。児童からの要望等を加えながら読書指導担当者と児童会係の指導の下、児童会が主体となって学期1回ずつ運営する。読み聞かせ活動は、全児童と全職員が輪番で工夫を凝らして行っている。

(4) 読書活動推進のための読書冊数目標の設定

毎年多数の本を手にする子どもたちは、朝の読書活動や学習中の調べ学習で活用する本を除いて、自宅に持ち帰り読書するための貸し出し冊数目標を設定し、学校内外での読書活動を積極的に行っている。今年度、児童が設定した個人の貸し出し目標冊数は、150冊から300冊で、全児童の合計は2300冊である。1月末までの全児童の貸し出し読本冊数は1900冊程で、個別には200冊以上の読破者が3人となった。本校の蔵書は学校標準の120%ではあるが、児童の読書量は蔵書分では収まりきれず、新書購入を全児童が待ちわびるような読書意識の高揚に繋がっている。

3 親子読書会の活動

(1) 活動の組織

P T Aが親子読書会を組織し，正副会長が実質の企画運営を行っている。組織の活動には全保護者が携わり，定例のお話会の計画立案と運営，夏季休業中のラジオ体操後の読書活動の支援，地域朗読放送活動，文集「せきれい」の作成と発行を行っている。

(2) 活動の概要

ア お話会

親子読書会で年間計画を立案し，全保護者がお話会で児童を相手に読み聞かせ活動を行ってくださっている。作品は，保護者の思いや願いの詰まった内容で，児童は興味深く読み聞かせと保護者の説話に耳を傾けている。



保護者の読み聞かせ

イ 夏休みラジオ体操後の読書活動

夏季休業中の定められた期間に，地域在住の児童はラジオ体操を行う。ラジオ体操の終了と同時に，それぞれ家から持参した本でおよそ20分間読書活動を行う。子ども会育成担当の保護者が読書活動を支援する。生活規律の乱れがちなこの期間に，落ち着いた生活のスタートを切るきっかけとなっている。

ウ 地域コミュニティ放送を活用した朗読放送

高齢者在住の割合が高い本校区では，児童の存在は住民の活性剤とも言える。毎月2～3回，日曜日の早朝に，地域在住児童が地域放送設備を利用して朗読発表を行っている。



地域住民への朗読放送発表

エ 文集「せきれい」の発行

親子読書会発足後33年間にわたり，文集「せきれい」を発行している。親子読書会の年間最終活動で，全児童・保護者・職員が原稿を執筆する。読書に関する思いや願いを様々な手法で記し，一冊の文集にとりまとめている。

4 近年の読書活動に対する被表彰

平成25年11月 県読書活動推進優良校 県教育長表彰

平成26年 4月 文部科学省読書活動 文部科学大臣表彰

5 おわりに

「読書は情操を養う」。本校の児童は読書活動の推進により，心豊かに成長を遂げ，優しい心を育み，友達を分け隔てなく異年齢でも相手の気持ちを察しながら対応できる心を備えている。また，読書活動で身に付けた集中力や自力解決力は，学習活動等でも課題に最後まで取り組むことなどに活かされている。

このように，本校の読書活動の推進は，児童の心を豊かに育み，よりよい人間性の育成に結び付いている一つの要因と言えよう。